宇治拾遺物語　一　（江戸後期）

椙山女学園大学デジタルライブラリー

椙山女学園大学図書館



今昔物語 六十卷
舊本今昔物集 写本 卅九卷
宇治大納言物語 三卷
宇治拾遺物語 十五卷
右 隆國卿著書
件等候 宇治拾遺物語 荒々 見侍 大和物語の一変
とおぼゆ 今昔物語 ハ 巻をわけたるもの 也 いまだ本を見ず
下行の如 井 序長秀 ら 校正 ところどころ 加筆 なり
其 附文章 をもけちらくまる 也 和漢通用 やく 用いるもの
きなり 寛政 利木 芳洲 三月上旬

東京大学

世に宇治大納言物語といふ物あり 此大納言
ハ隆國といふ人なり 西京殿 の孫俊賢
大納言乃第二の男なり 年あつまりて
いあつさとよびていとゆをやてゐ 刀うり ハ
刀ものでい 平等院一切経蔵乃南の山きわ
よ南家房といふ所 ハ 今もかくれをり
さて宇治大納言といきるてまりもとぐさ
ゆゑよけてあつけある姿すてゐむ を

うるにしきてもてみかもごめてたまるうち
ち紙もてあみごせなどして往来(ゆきゝ)の者(もの)
をもうきいろをいとずよびあつめむり
物語をせさせ勢(せい)そく我(わ)もうちにうれのやう
かくるまゝうのしておもひきたる双紙(さうし)よみ
きゝ天ぢくの事もあり大唐(たいとう)のもの
あり日本の事もあわうれうちにもう
ど記(しる)してもありのそれなる事もあり
なすらく事もあり、かくいろ〳〵物語をあり利口
なることもあり、さ程(ほど)くだらぬ事(こと)を笑(わら)ひ世の人これ
をきゝうしみる、十六拍子(ひやうし)あり、うた本の心(こゝろ)ばせ
そりて後朝(きぬぎぬ)の文(ふみ)といふもの人のをもてそ
あつまりけるいりみなりにまるあらばなさう
しき人(ひと)くあそこまるあらばかほ物語(ものがたり)かほ
くふまり大納言(だいなごん)ものうれ事うらさ入
くもる本をあるにてそさるかどにいまれも

又物うちかきいまするついでにうち
納言物語にもれたるあたをもまき
うちなれ事をかきあつめたるなるべ
し名を宇治拾遺物語といふ宇治う
のことまをもてうちとをきうるやう又後を
拾遺といへど宇治拾遺物ごうちといへるも
やうべつにあるべきにはあらず

宇治拾遺物語惣目録

巻第一

序

道命阿闍梨和泉式部之許讀經事
乃祖神聽聞事
丹波國篠村平茸生事
鬼仁王経事
伴大納言事

随求陀羅尼竜頭法師事
中納言師時卿乞食検知事
鈴門理鹿乞食事
易乞食事
白治敏倒逆報事
源大納言雅俊一生不犯事

児乞食事
田舎のちごども打ち殺す事
小箱を算よおどされ事
大童子魅ぬもみたる事
尼ちごども打ち殺す事
ものやうじや百鬼夜行の事
利仁暑預粥事

巻第二

清徳聖きどく乃事
静観僧正行脚路事
同僧正大嶽乃岩いのうしろある事
金峯山落蒲打事
用純あくまさの事
原行死人をよみもどす事
鼻長僧事
時的封蔵人か将事

季通欲逢狭事
秀喬合保昌事
明衡欲逢狭事
唐卒都婆へ血付事
なりむら強力ばけをせるある事
柿木へ仏現ずる事

巻第三

大太郎ぬすんの事

菅大納言忠家牧言女放尾事
小式部内侍定頼卿乃給言事
山伏事
多田新發意卧木事
固懐玉別當地蔵作事
伏見殿理大夫俊總事
北門衛司女葬送附牧牛処事
崔瓘寓事
小野篁廣才事

同人佛事乃事
菊云事

平貞文本院侍従事
一条摂政歌事
孤雲大徳事

巻第四

きつね人になりて女と会事
佐渡国に金事
薬師寺別当事
妹背島事
石ぶみの下よりうめの事
東小院菩薩講延事
三河入道遁世之事
進命婦清水詣事
葉遠朝臣蘇生事
篤昌忠恒不和事
仁和寺僧大六佛奉作給事
式部大輔實重於養母孝行事

智海法印癩人法談の事
白河院御寝のまじはりおそれを行ふ事
永超僧都異食の事
了延房と賀茂自湖水中法文の事
慈恵僧正戒壇くづまたる事

巻第五

一 宮河奈地蔵の事
仮見修理大夫二教之人死行む事

以長物忘の事
範久阿闍梨西方をうらのせざる事
陪従家綱兄弟かたらひ欺く事
陪従清仲の事
かめの暦あらへたる事
賀茂にあそぶ人賀茂のしたる事
御室と御室戸僧正の事
并一条寺僧正の事

或僧人の許へ狐来ること
仲胤僧都地蔵現説法の事
大二条殿小式部内侍を歌讀ませ給ふ事
山横川変能地蔵の事

巻第六

廣貴依妻訴之夫魔王宮へめさるゝ事
世ゐる寺は死人をやつるゝ事
留志長者事

清水寺に二千疋参詣者打入双六事
観音現化能人をゑやまひ給事
契沢の社より市幣紙来ル事
志賀の辻堂の湯は観音沐浴事
帽子児を孔雀問答事
僧伽多羅尼品事

巻第七

五色鹿乃事

播磨守為家佐多事

三条中納言水飯事

検非違使忠明事

長谷寺參詣男利生事

小野宮大饗事 付西宮殿富小路大臣

本大饗事

式成源満則貞本三人被滝口弓藝事

巻第八

大膳大夫長房被配流事

下野武正大風雨日參法性寺殿事

信濃巫覡事

敏行朝臣事

東大寺花厳會事

猟師仏を射事

千手院僧仁仙人事

巻第九

滝口道具習学事
寂昊志和尚教乃事
越女敦賀女現者助行事
くるまをけづるを供養せし事
ほねものさう即ち仏ぐ〻なる事
欲よくそく報免罪事
大安寺別当女嫁せる男者見事
傳変打聲入の事

巻第十

件大納言應天門放火事
放逸樂の還よ曼季ひるる物事
堀川院の還よ笛ふくさせ給事
浄蔵ゞ八坂坊の強盗入事
そらを飛のさるさゝゆる事
吾嬬人止生贄事
豊あ事

冤人報死事
小親當平事
海賊發心出家事

巻第十一

あをたね乃事
保棟盗人ある事
晴明を負ふ僧の事付晴明救蛙事
河内守頼信平忠恒をせむる事

白川法皇水面受領の下つぶれまねの事
冤人得業猿澤池竜ㇾ事
清水を御帳給ふ女乃事
則光盗人をきる事
宮入水ㇾする僧乃事
日冤上人吉野山にて逢鬼事
丹後守保昌下向乃時殺経文逆事
出家功徳事

巻第十二

達磨見天竺僧行事
提婆菩薩条誹樹ざさの浮事
慈恵僧正栄引受戒之日事
内記上人破法師陰陽師紙冠事
持経者殿賀効験の事
空也上人臂観音院僧正行直事
増賀上人参三条宮振舞事
聖宝僧正汲一条大路事
穀断聖不實露顕事
季直朝臣将教乃事
稚児小童隠題奇讀事
する忠信の讀事
法ゆきの事
あづまの人三の乃事
河原院よ駈云霊恒事

八歳童孔子と問答の事
鄭太尉の事
貪俗親佛性富の事
宗行卿ホ射虎の事
遣唐使ゝ被食虎の事
或上達部中将ゝ射逐ニ名人ノ事
陽成院ゞを拍の事
水を求飲むさゝびの事
一条桟敷屋鬼の事

巻第十三

上緒主得金の事
元興寺落るの事
俊宣迷神ゟ助る事
亀ゝ報ゝ恩ゝ事
名取翁人ノ事
大井光遠妹強力の事

或唐人女乃ひつぢにむまれかはりたる事
してもろもろ
出雲寺別當死歸よみがへりたる事
かつらゐにて食事
念佛僧魔往生事
慈覺大師入纐纈城給事
汝天僧入冗事
窪照上人冤鉾事

清瀧川聖乃事
優婆崛多羅事
巻第十四
海雲比丘童子事
寛朝僧正の事
經教くちもそこなはれの事
魚養乃事
新羅國石金榻事

珠のあやしき先量の事
仏面女難使六事
仲滋僧都連歌事
大将慎事
仏堂開白供大疎略等きこと事
る階仮平り身入乃笠下術事

巻第十五

清見原天皇与大友皇子合戦乃事

頼時り胡人見事
賀茂祭乃ゝり武正車行供覧事
門部府生海賊射返す事
五位判官代通清人遠ざて厠白殿り
を合事
極楽寺僧施仁王経語事
仲良縁野世恒岐海門供下文の事
相應和尚上都率天事 付澡瓶石奉

新事
仁戒上人往生乃事
秦始皇自天竺来僧禁獄事
後乃千金の事
盗跖と孔子問答乃事

宇治拾遺物語巻第一目録

一 道命阿闍梨和泉式部之許讀經五条乃
祖神聽聞事
二 丹波国篠村平茸生事
三 鬼にもの云事
四 侍大納言事
五 随求陀羅尼竜顕法師事
六 中納言師時乃亡魂検知事

七 於門鹿仁歌舞事

八 易乃うらかたを食出事

九 宇治殺害をせ物て資相房僧正落着仁
先さ酒く事

十 秦兵衛久向通後卿弁悪口事

十一 源大納言雅後一生不犯舎うさせ事

十二 児乃ち餌出家ー空寝ー事

十三 田舎れちと様乃ちかと見てあく事

十四 小袖を奪仁おとさ通ち事

十五 大童子鮭ね出ち事

十六 尼地蔵乃ち見てまろく事

十七 假行者逆言鬼仁成事

十八 利仁暑預賜事

今もて通夜阿闍梨として傳供奉のよし
あまりそそる憎あまりて和泉式部にかくなん経
をあげさせくらみまりそまりまかりいでなんとせさて
ぬしかりけるほど目さめてく経を仏供養すべく
只ある法花八巻をよみてくあけぬるほどに
んとするかどもの人のもとへこれかきてあまた
まうとそれもまだきにかへりまいりぬ
いかもれしのいとものへ本
いれをれぞこれ御経をとよれうをきりぬる
乃生て世こうをれぐくいとれ
経をよみてもつるほどに



おのれしもいそぎまゐとていま帝釈(たいしゃく)にいたりぬ奇(く)しく
清(きよ)らなるところにて七宝(しっぽう)を飾(かざ)れる梵天帝(ぼんてい)とおぼしき
ものありて聴(ゆる)さねば勝(すぐ)れたるものどもか
ぎりなくありてうやまひをなしてをよびいでぬ
その閼伽水(あかみず)をいれてさしあげつつ七仏(しちぶつ)の梵(ぼん)
帝釈(たいしゃく)もともに聴(ゆる)されたまひてかうべをうごかし
くうをさしてさしあげたまひぬるをうけとりて
くいのりとおぼしき事(こと)ばかりをとなへたまふ
をもてもちてくうをさしてしめしたまふをみ
仏(ほとけ)讃経(さんきょう)威儀(いぎ)をととのへたまへと恵方(えほう)を
つまびらかに先行(せんぎょう)よこたへて

ゐまこも今はむかし丹波の国篠村といふところにて年九年
半面のあこもあくわうとせきり里村乃ちをよりまで代
るまそくんでもおほざまでまくまれもとれるのどこて
うおほもくほうとにうれ里のそるとてもおほとある
ことおほんよおうらおりのをひをおほうどもれ二三十
人ぐらいくおくべきまとくいれまでいう船る
おとうとつよこ乃法師もうへこれをつう
ひうくまくいほうあがこのことを乃編法まて
へまおりのあんずるおをれの川おあるまこにもこまる
おを乃うをやさでもとれをれくこ乃うをも
うとおをとくられどほまてあそなでどうと

宗徒

兼座のやれどにてこほうどうこう乃里九人の美
こ乃宮おの人くくりとておまう同様のかれ九仏を元
おそーをくまねさて次乃とし九十月のとうめる
にさ死ぐのそかうる法どるまこ山よ入く葬をもし
ふにもべく読おうこそぐ仏ぐにて故仲継僧坊とて読法のび
なき人いまりまうもこ乃事を知てあそいうにて不浄読
法をおほ法師平葬にもまるおとう乃あく物をを
の行ふくぎうさまこいうほもく平葬ふうそくさんに
おくまうび死物とうぐ
あ里をいまをもむう右ぬふにて大るるふあるる物を乃

あり。さるほどに、大きなる山へ入りぬ。雨風にあひて、こゝかしこにて夜をあかさんとするに、山の中にて、ものすごくあやしげなるほらあなを見つけて、入らんとするに、未入口にて、ものすごき鬼ども、二三人、あらはれ出でて、入口をふさぎて、入ることをゆるさず。いかにもして入らんとするに、





が家乃おうひんぐにあるいもぐの書ぬ紙を北ろくにいもし
ゐもしこと他ごとに年乃あいう希一せうあるよ男乃人
いもぐのこりあいくこもそれぐこそ乃おもそもしあへぐ
く西へそこ乃冠着ぐ家乃ま人ほどこそて追ためこも
てさ乃法へして額をうちもて通せろし我ぐう冠着
もそ見てもとい乃ぬあさほーと人どもきこてなまあーぐ
かう紙をれぐこむーをこそくるこそ事西をせぐ出そこ
ーか乃人一せる奈ろうそてうれ次よあ先んこるぐとこう通
あるくいしくるこそれりのお法こまもてる人ども一衣にそや
まてろれ世ろふまぐれりよ江ぎそていよ字あ
あ堂ろ いまはしぐ中納言阿といふ人あそーをうぐ

ほそもそてもとのほろて西ろ後きこ堂ろ先乃私れみぐ野
よ不動智恵海安とてよきさうけく未練よれ会陳乃大ひる
さろもさげ世ろふ私ぬ法行入きて世そう中納言あれ、
ろにほそる僧ぐと世ぐ稼ぐあてをとのれにおあをお元
ぎにるのてかうれ也てそろ風くいをもろ乃べてるて亜始
こもこ乃うこ生死よ流物をるいをんずる衣煩悩にひう
へうきてくいさてくてう紀也私おあぬよてお堂を
毛盆ろうと思ろもてかんのふをきろもまてくにと人の
世もび生死乃ろうれ我ぐそけんと衣をひそう世る産人
よいとうの中納言さて煩のふを元うをうとういうにと
ぞれ行へそろくいれをれらんぎよとういひく衣乃まう人



ふるともあるよう。狂惑の法師ありける。
大和ぶみよ。飛鳥といふ所あるをもちゐてみける所
の名をとりて飛鳥乃屋といふ。これをよむうたなどもおほ
しく出ようをもちゐるさまなどあをそれをもとゝして
をかしきことをいひ出をもちゐるやうなどうたうたふ
うたふる夜照射よ出よあり。鹿をとる光あるを
をほどに同我あるを出ようなどいひてありもちとて
てをりまたりくするにあの同我あをせるあの
矢ぶくろの風ふくもちてほぐしにうをて矢をそぎて
いんとてそちあるとをてみるに、この鹿の目よりあの
きいの鹿の目のあるをひきもちかくて目の穴

おそろしをそれどあるを、とおもひてくらいたうさ
てうくとあるに我あやしみをれて矢我を
ぱして矢我ありてみるに鹿の目よりぬるうを
をとみくかきべねさまとりひくちかくまえう
よをそれで矢ぶくちやうの草うてあるな鹿
ありとそみんとするに我目のあるざるを我
をそうちにちせてみるに法師のかくこれ
法師いうにとんくものきくうちあれて
矢をちそこれで矢乃屋の目うちをとをくとをの
屋をりづきてうのあをいうあをいうにかくて
おそちまたぶしへでおろくとなきてあるせい

あつて、此女抔うごきもなしおきにそろ〳〵根ハふ取
そしおの歎いそ〳〵易れ石〳〵いふまとやをそしまて〳〵とへい
いさく取ねをんろうの〳〵紗ふ取ろなる事ハ生ふ落きこと
いへだざるいるといふくさてをるにまりて千ゑ金
をひいさるろれもきまへをよそはいおうとしとへいをのれ
りおを取うせ仲一切りに世中にあくべきなの抱ハ
ゑいさせをきてやしなふらいまいん十年ありて
ろうの月におてに接人まて取ぐくんとれろうの人ハ
金抜すまをひくめる人まろうれよその金抜こひ
くくめへぐさりくんもろそうまてき姥のとやしく
今までい歎の取きさせくく仲一抱ハきこいけ

[片汐]

こそほろひくおとてきていうぐさ抱を仲一おまろ
よい法一かふ親の〳〵月見をくあぐ〳〵と後ハ取ろう
きかよあろうとてたてて取ぐろ紗へまハ金をひ紗へ
ろの人ろうとふくやろうとふぐ金ハ手海をろう
さるおとあるろんそ女をかくきをみにてくゆきて人よ
をもうせぐくろら抜くおをしれぐうこれかけるこ取
すん二ふををいふまで中にのくまふ金いあくぐふまて
をうにぐくろとふぐうつひ紗へと抱〳〵くおくくにろ
こ乃女ハお取乃あきう乃石ふ上くふてて公女乃あうこ海
抜りんがへきるにいま十年あつてまぐくろくんと於
うれ月日易ハ石すう男きて取ぐくんをろふとかうへ

てかく予令あるとぎをてはまぐこ記さうまつてそうつ
ひこひいくはまぐくいるんほどにつくう拙なくて
どひるんと思くもろいれをこへ死をうそほにとこの
我をうるうなそでこてまふ我なうち法をてお乃
人をとおくせめをれるおまこをもおきの古する物そ
お法をとおそうこなのいごて我へいぞくいる
をかもちとおりおきの下いりも来を覚
よさしてたるままにてありける
おまをいまはむこうる陽院造うる間う治成
出強るにくまさ世行あひごめこまこさ世行そ公
ちをがを世行ふ仏参僧云ふ初らまんとそ先に

法うおほどにまでまひごさる紀よ女房乃局を高
よ女よ拙きてやていそく別乃おとにあらびきと自こ
ま出をてまうるにるまてておくおそこまおなうう僧云
さうこまござるかさ紀よ護法さ紀めもてさいそてをいえ
らひさおうへなうををぬりぬとこそやをれ則よく
るこ世行よそう心参僧云いえびかうぬる事
ままはむうこ治つ通後卿後捨送をおこうえき
きるさ紀泰無火仏向くをもづこ云の此ご座いるや
ひくうめびいそるに治つそいぞおくお拙ごるもしていれ
ふうそをかよるん出るといえまこうんしそびし
きぬなすほ三条院うくまこさ世行てうち園宗もう



撰集うを平泡ろてあそすあてあこ海ーきこおとろ
ろ風つと柔大納言寺に
出きくそ人をそひをろ風ろ人ばとそて
たれこそ風どれあるでありをまー
とこみ行へる給ぐぐ平純のそそ世人くちにろう
てや給るいろれ寺に人をそ出るとあるとまる風ご礼
あるでなるとまま」とあ給るなれこそといひまする
いろま」よんおるのでさ海あるにいうなま」だ空柔大納言
乃そめでくま久入そ見後るべまそかく海人乃撰集
うを平まそろて空こくび行あさまーあこそろう
とひくぬよあり。さふこひ通後乃りへ申て空久

こそおろく〳〵て出あるまことおろうあまこ〳〵浴つ〳〵うちうれづきてさるとをりくるとれおいうとぞさまこけるあまこさんいまもう京極乃源大納言雅俊といふ人おそろしきものをとりくるに仏あるまして僧よ鏡なくこせうく一生不犯なるとあるとろくに婦をおかさまけるにある僧乃孔盤にのぼりてをこしおうまきしきかしらの色うに燃くる境木をるとてありまえしてうちをやしてまそこしてありくれぬ大納言いにと思さまけるほどに色くいさしくおもいそうくあるとをまこだ〳〵とおぐ法のなくるおきを

ほどにおの乃僧よ飛くおるまうてかそうるみいうびきといふをまこ諸人おそごいをそれもてをうひをするに一人乃僧ありてそうるえいくほぐそうにくまうひしそうと向くるにこの僧うびをひ経りてきとおうてきうひきといふよ大うそごうえあうりそれまおまこにやうそをてうそごあるまをを今へむうし法華乃山よちごありをを僧をちうれ乃法まくにいざうひんとういそるをおうちごんよせてきうまりさうそしていざうんおきちて猫ざうもをるうとうんとおそくおくるうとて猫ろ





今はむかし、飛騨の国に老尼ありけり。地蔵菩薩
をあつくたのみたてまつりけるが、ひとりの
きて、暁おこしに地蔵尊をまつらんとてひとよ
うにさごいあるとくに悦びうちおきてみる
ぐるんとく尼にいさましきよのひとさら給ふといへど
地蔵菩薩のあるさにあるとおぼえるにあれ
さいとせんとてかくありとくなりといへどもうち
ありとかせ給ふこちそ氣こそもうせれいさ
給へあるせさいとせんといへどおこしきこ
こと氣ちざさうのあるとかせ給へんへ氣なぬ
くかなとをよとおぼえるの後をさもおぼえ

屋そのかくまんとのたまひしかばきてうきぬくあまよ
ばうんとのたまひしかばきてうきぬくあまよ
ねぎてそうそれぞうちいうちいうちいうちいぬ
あまへちざさうのさもせんとてかこまでかなどもは
もの後をこれ氣こそ氣こそ氣こそ氣こそ氣こそ氣こそ
れりの何ごにて十年ばかりのきてうの後ごちざさう



いまのもぐりの法師着ものあつまるが津乃国まで
いきそうろうと申うけたまわりそうろうせんちそく大明
寺乃御寺ものうへ申きかせまいらせ候ほどに
ぞうらぬ候こんどもろもろにまこと候ふべき
おうらと申さいうくぜんと思ひくに負うちが浴て
内よ入くきり不動の呪をとなへくなさるに夜中
でうるに仏ぬくんとおもひ候ほどに人くのこゑあまり
しくる故とすかうこれぞくよおとれ大なる色
くへ百人ぞうとこの堂乃うちにてひとう
ちわくてこれた同一法そうれどきはくおう
人ももあらばあさまの死地ともおもひ

解かれそうなをもつてだうう法師ぜひうも
ろうたうろうしと思へどもせべき候うもあつてなれ
ぞおうくこれぬねるぞゆこ候もなくてもそうも
ろくく大なうらうもうてそれをきくこんあいふ候う
我おうるべき在ようあそこし化不動ぞそお行をれこよ
れもうろうへおうよおそをそて庁よりてそれをうさをて
堂よそんの下にも人法ぞうほどにおうされぬねそて
おの人くのもりてそうぬまもをにあさはしくおそ
法しおそけ名の風そく夜乃あをそうーいもんとれ
ものようおうらうして夜あをおう。うちみまそーこ
まぞおるも。もなーそふくとある郎乃まへ





むつへよてるにくるをまて二せどうてゆうでおとといへ
そーいをねねのごぜと狐くめでんこの狐の変化あ
ふことのまで帝のうちに行つきてつへとそ風て
へ荒涼乃使おといつようれ弾ぜよまおでいるあう
ーとよよそ風く狐んをしくてのに之祖くうとさおるそりとよよあそてそうとさ祝ぐゆうく
うをぬくてうう夜いたよそ狐うて法ら先てさく
おてりそに祝よ已時そうとに卅揚えりうとと
くくるありおにくあんとみるにそのごそもまう
でそうととへだ祝定のおとうにとほとにそ
ちうたちあくるうてそくとおるほどにれえよ

宇治

宇治

御あこにおそ一さうおつとへだ利たうちほ二へ
てたのだでれそうく祝おとれしき卿ホもてみまて布
それ事乃につるありとにおまず馬にあるやとうへ公主
さおくとて食拘をして来をれるうれ智にありり
かくくみ法おくにおとれしき卿ホ乃にみう祝へ
老うれおうえさのくりう成乃河そうに大えん
所乃むねをきりにきうて食ホ也行しそいれる
おとにうそ一えあよ僧めさんれどさえそ也行一
法どにて例っくに仕さおくぬ食うるにうさえそかを法的
乃ま二へそねうり別乃おと例一ごえ番ふれ
濱うて数乃てー也行法おにあれ也てそうち





ISSEIDO
一誠堂
東京神田

